

博士學位論文内容の要旨

学位申請者氏名	佐藤麻衣
論文題目	戦前期のニューヨークの日本人社会とメディア研究
論文審査担当者	主査 坂口満宏
	審査委員 本田毅彦
	審査委員 峯村至津子
	審査委員 金澤哲

本論文は、序章から結章まで全 11 章の本文編（1～118 ページ）と図版や典拠・引用文献の一覧を収録した資料編（119～230 ページ）の 2 部構成からなる。本文編はさらに研究課題の所在を論じた序章、アメリカに渡った日本人による文芸活動について述べた第 1 章から第 4 章、戦前のニューヨークで活動をした日本人画家たちの創作活動と新聞・雑誌にみる美術批評、ニューヨークで開催された邦人美術展覧会の様相と開催の意図を考察した第 5 章から第 9 章、そして論文の全体を総括した結章に大別される。

序章 まず本論文の研究テーマに関するものとして、アメリカで発行された日本語新聞、日本人移民による文芸創作活動、日本人美術家による芸術活動に関する研究状況をとりあげる。そのうえでそれぞれの分野における研究成果の深まりを評価しつつも、それぞれの研究が「書誌」「文学」「美術」へと個別分散化し、相互の繋がりを見失い始めていることを指摘する。かかる研究状況を克服するため、本論文では活字による創作活動と美術作品の制作・展覧という行為が、ともに日本人社会とアメリカ社会をつなぐ媒体（メディア）であったという視点に立つとし、戦前のニューヨークにおいて日本人によって発行された新聞・雑誌にみる文芸作品・美術批評と芸術家たちによる活動を包括的に再検証することで、移民としてアメリカに渡った人々が異郷の地で創作活動したことの意義を明らかにすることができるとした。

第 1 章 日本人が発行した英字新聞『Japan and America』 - 星一のメディア活動 -

1901 年にニューヨークで発行された英字雑誌『Japan and America』の発刊の意図を探り、『Japan and America』は日本の実状を英語でアメリカの人々に紹介するとともに、ローマ字で記した日本語ページを設けることで、アメリカの実状を日本語話者にも伝える雑誌だったとする。さらに同誌と西海岸で発行された各種英字雑誌の内容比較をおこなうと、西海岸で日本人によって発行されていた英字誌が排日の抑止を意図したものだったのに対して、日米貿易や商業に関連した記事を多く掲載した『Japan and America』は、日米間の貿易の促進を重視した雑誌であるとした。

第 2 章 永井荷風と雑誌『太西洋』 - 「夜の女」の初出をめぐって - 〔付〕『太西洋』第 1 号～第 3 号目次

1907 年に発行された雑誌『太西洋』（太の表記は原著通り）については、永井荷風の『あめりか物語』所収「一月一日」の初出掲載誌として、第 3 号の存在は明らかになっていた。著者は二

ニューヨーク市立図書館に『太西洋』の第1号から第3号が所蔵されていることを突き止め、その第2号の編集に中村春雨と田村松魚が携わり、そこに永井荷風の「夜の女」が掲載されていることを見出した。さらに『日米週報』の広告欄に『太西洋』第4号の目次を確認し、そこに初出誌未詳とされていた永井荷風の「落葉」の掲載予告があったとした。かかる調査をふまえ、永井荷風のアメリカ滞在は、これまで考えられてきた以上に、ニューヨークの日本人社会と関係が深かったものと推察できるとした。

第3章 田村松魚のアメリカ滞在記 - 日本語新聞の文芸欄と移民地文芸 -

〔付〕田村松魚著作年表（1903〔明治36〕年8月から1913〔大正2〕年4月）

修学を目的に1905年に渡米した田村は、サンフランシスコの『新世界』やロサンゼルス『平民』で編集に携わり、文芸欄に日本人移民の生活を描いた作品を発表していた。西海岸の移民地を転々とした田村は1907年にニューヨークに赴き、『日米週報』には俳句を発表し、雑誌『太西洋』では編集に携わる。また英字紙『ワールド』の懸賞小説に投稿し、その英文小説が当選していた。田村にとってのアメリカ滞在は、移民の生活を写實的に描く創作技術の鍛錬とともに、編集者としての経験を積む期間だったとした。

第4章 石垣栄太郎の文芸活動 - 『日米週報』と『紐育新報』の文芸欄 -

1925年以前の石垣栄太郎の創作活動については、美術作品もあまり残されていないことから不明なことが多い。本章では、まず彼が西海岸の移民地からニューヨークに移動する転機になったとされる、ガートルード・ボイルとのスキャンダルを題材にした小説「その夜」（『新世界』に掲載）の内容を考察し、ついで『紐育新報』と『日米時報』の文芸欄に掲載された石垣の文芸作品を分析していく。その結果、石垣が日本語新聞の文芸欄に私小説的な作品や世紀末文芸の影響が表れた作品を発表していたこと、また、『紐育新報』に発表した小説「罪人あるなし」では、作者の分身と思しき画家を題材にしていたが、この時期には石垣の美術活動に大きな転機があったことから、小説に描かれた画家の死は、石垣自身の美術活動の転換を描いたものだとした。

第5章 ニューヨークの邦人美術展覧会と日本語新聞 - 紐育日本美術協会と画彫会の展覧会 -

1910年代のニューヨークで活動した日本人画家には、日本で美術教育を受けた後に、ヨーロッパに渡る目的で一時的に滞在したものが多かった。しかし、かかる画家の多くは今日無名で、作品の所在も不明となっている。本章は1917年と1918年に紐育日本美術協会主催で開かれた邦人美術展覧会に関する新聞の美術批評を悉皆調査したもので、二つの邦人美術展覧会はいずれも日系企業の援助により開かれたことから、展示作品には、ヨーロッパの古典的絵画の模倣や東洋趣味を基調にした商業目的の応用美術が多かったとした。その一方で、1922年に開催された画彫会の展覧会には、国吉康雄や石垣栄太郎といった、就労目的で渡米し、アメリカで美術を学んだ画家たちの作品が多数展示されるようになっており、日本人社会の後援を受けた展示ではあったが、その展示作品には西洋画の技法が多くみられ、画家の「米化」が認められる展覧会だったとした。

第6章 独立美術家協会とサロンズ・オブ・アメリカの日本人画家

- 狂騒時代のアメリカ美術界を背景に -

独立美術家協会とサロンズ・オブ・アメリカの展覧会に出品した日本人画家の作品の様相を日本語新聞と英字紙の美術批評、展覧会の図録をもとに考察する。1920年代のアメリカは、第一次大戦後の好景気を背景にした狂騒の時代であり、日本人画家はそうしたアメリカの文明社会を皮

肉とユーモアを交えて、客観的に描出していた。彼らの作品は、外国人の視点でアメリカ社会を描いたものとして、英字紙でも注目されるようになっていた。アメリカの美術界で活躍し始めた日本人画家の創作は、1920年代のアメリカ社会の実相を記録したメディアであったとする。

第7章 紐育新報主催の邦人美術展覧会 - 角田柳作のジャパニーズ・カルチャー・センターとの関わり

1927年に紐育新報社が開催した邦人美術展覧会の様相と開催の意図を探る。同展覧会について『紐育新報』は、美術作品の展示を通じて日米の文化交流を図るとしていた。そのため、展覧会の批評が複数の英字紙に掲載されるようにと、その招待会にはニューヨークの有力紙各社から多くの記者が招かれていた。他方、この展覧会の開催時期とほぼ同じころ、日本人会の幹事だった角田柳作によって「日米文化学会」の設立が提唱されていた。そこから、紐育新報社が邦人美術展覧会を開催した背景には、日本人会による日米親善と文化交流を意図した「日米文化学会」との関連があったと考えるのが妥当だとした。

第8章 1930年代のニューヨークの邦人美術展覧会 - 芸術活動と日米外交政策 -

邦人美術展覧会は、アメリカの美術界で活躍する著名な日本人画家の作品に加えて、官吏や日系企業の駐在員といった素人画家の作品が展示された特異な展覧会であった。その背景には、1931年の満州事変以後、日米関係の情勢悪化を懸念した日本人社会による文化交流と外交政策があった。また、英字紙の記者を招いた招待会では、芸術作品を通じた日米両国の協調と親善を説いた角田柳作の講演原稿が読み上げられた。これらのことから、1935年と1936年に開かれた邦人美術展覧会には、日本人の美術作品の展示を通して、日米親善と文化交流をはかろうと意図した、日本人社会主導の外交政策が背景にあったとする。

第9章 世界恐慌期の日本人画家 - ニューディール政策とリベラルな美術家の活動 -

ここでは ジョンリード・クラブの美術展覧会（1929～1935年）、Work Progress Administrationによる雇用促進政策と日本人画家の作品展示（1935～1937年）、ニューヨーク市美術委員会主催の展覧会（1934～1938年）、反戦・反ファシズムをテーマに開かれたアメリカ美術家会議の企画展（1936～1937年）という4つの団体との関りを通して、世界恐慌下のニューヨークにあった日本人画家の創作活動の実態を明らかにしていく。なかでもアメリカ美術家会議による企画展には、日本の中国侵略とファシズムに抗議した作品が数多く出されており、日本人画家による反戦思想とアメリカを支持する立場を明確にする場となっていた。またニューヨーク市主催の展覧会では、市民権のない日本人画家が反戦と反ファシズムを訴えており、アメリカで活動する画家たちの不安定な立場と帰属意識の葛藤を示す重要な展覧会であったとした。

結章 第1章から第9章までに述べてきた点を「メディアの果たした役割」、「異郷で創作する意義」、「帰属意識の変遷」としてまとめなおし、そのうえで日本語新聞や雑誌に掲載された文芸作品は、当地に暮らす日本人の生活の様相を日本語読者に伝えるものだったこと、また美術批評から浮かび上がる日本人の美術活動と作品は、言語の枠組みを超えた創作者の意思を伝えるメディアであり、日本人社会とアメリカ社会をつなぐ媒体だったこと、そしてニューヨークにおける日本人画家の美術活動は、日米間だけではなく、一世と日系二世の世代をつなぐ役割も担っていたとし、多岐にわたる日本人のメディアは、ニューヨークという東海岸の都市を背景にした日本人の移民史であるとして結んだ。